命の大切さ

岐阜市立岩野田中学校 3年
井手 花（いで はな）

「子供が生まれたら、犬を飼いなさい。」

これはイギリスのことわざです。作者は不明ですが、今も世界中で親しまれている言葉です。ペットとのふれあいは、私たちに幸せをもたらしてくれます。遊ぶ相手をしたり、食事の世話をしたりすることで、相手を思いやる心が身に付きます。

私が5歳のときに初めて犬を家族として迎えました。名前は「ユキ」です。ユキはペットショップではなく、動物愛護センターから譲り受けました。母が「犬を飼うなら保護犬にしたい。ペットショップの子どもの犬も、捨てられた大人の犬も同じ犬だ。犬に罪はないのに、人間の都合で捨てられるそんな犬を救いたい」と考えたからです。犬好きの母は学生の頃、保護犬の世話をするボランティア団体で活動に参加していたそうです。5歳の私はそんな母の考えをはっきりとは分かっていませんでした。

ユキが家に来たときは6歳、人間でいえば 40 歳でした。ユキと過ごした時間はあっという間でした。私が 12 歳の時、ユキは亡くなりました。人間でいうと、64 歳に当たるそうです。ユキをなくしてから1週間ほどは、泣いてばかりでした。中学生になり、部活動に夢中になっていた時でした。

家族みんながいつも当たり前にいたユキがいないことが悲しく、ユキと過ごした時間を恋しく思っていました。犬好きな母と私は、愛護センターを訪問したり、保護犬の一時預かりもしたりしました。

そのころ、ネットで出会いました。

「子供が生まれたら、犬を飼いなさい」。このことわざには、続きがあります。「子供が赤ん坊の時には良き守り手になるでしょう。子供が幼いときは、子供の良き遊び相手になるでしょう。子供が少年期のときは、子供の良き理解者となるでしょう。そして、子供が青年になったとき、自らの死をもって子供に命の尊さを教えるでしょう。」

この言葉に出会い、ユキと過ごした7年間がとても大切なものであったことに改めて気づきました。何より、私たちが寂しくてたまらなかったのは、ユキから「命の大切さ」を教えてもらったからだと分かりました。

1年が過ぎたころ、新しい犬を迎えることができました。「ウリ」という5歳のメス犬です。ウリはブリーダーに飼われ、繁殖犬としてたくさんの子犬を生みました。高齢となり、里親募集に出された犬でした。人間の都合に振り回される「動物」がいることに納得がいきませんでした。ウリだけではなく、保健所、愛護センターにくる犬の事情はさまざまです。捨てられた犬もいれば、高齢の飼い主が亡くなったり、高齢者施設に入るために連れていけなかったり、飼い主にもつらい事情があることも教えていただきました。ウリはなかなか私たちになじみませんでした。1か月が過ぎても、部屋の隅にうずくまることが多く、食事の声をかけても反応が鈍いままでした。私はユキを飼っていた時より、食事やブラッシング、散歩など、一緒の時間をたくさん過ごしました。6か月を過ぎた頃でした。ソファーで寝転んでいると、ウリが近づいてきました。私の背中側に伏せて、お尻をぐりぐりと私の背中に押し付けてきました。これは家族が「お尻アタック」と名付けた、飼い主を信頼している犬が示してくれる愛情表現です。前に飼っていたユキがいつも私たちにしてくれた懐かしい仕草でした。

今、日本で飼われている犬の数は 700 万を超えます。多くの人が「犬と触れ合う幸せ」「命の温かさ」を知っているからだと思います。環境省のHPによると、殺処分される犬や猫は 10 年前の 10 分の1になりました。保健所や愛護センターの活動、多くの人の善意により、救われる命が増えました。それでも、2千頭を超える犬が殺処分されています。犬は人間の家族、社会の中で生きています。すべての犬たちの命をつなぎ、守っていける社会になることが私の願いです。

ウリもやがては歩けなくなり、弱っていく姿を見せることになるでしょう。「命の大切さ」を知った私は、隣で「ありがとう」の言葉をかけながら、当たり前でないウリとの1日1日を過ごしていきます。